

---

# 竜物語

如月サラ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

竜物語

### 【Nコード】

N93890

### 【作者名】

如月サラ

### 【あらすじ】

舞台は人間が精霊や妖精などと契約をかわし、共に生きていた時代！。  
契約した人間のことを『メトセラ』、契約した精霊らを『セトラ』  
といった。

これは一人の少年が『セトラ』の中でも最高レベルと言われるSランクの竜と出会い、契約し共に旅をする物語である。

## 黄金の竜と少年の出会い

人間が精霊らと契約し、共に生きるようになってから生活は驚くほど楽になり、シルヴァニア帝国は栄華を極めていた。

しかしそれと同時に『セトラ』の力を悪用する者たちも数多に存在したため、国は戦乱の世へと向かおうとしていた。

ノームの花の甘い匂いを乗せ、穏やかな風がふきぬける。

ここはシルヴァニア帝国の東の最先端にある『ガルシア』という人口わずか30人くらいの集落地である。

広大な緑に包まれた自然豊かなこの地は年中過ごしやすく、未だ戦乱の火の粉が降りかからず穏やかな日々を送っていた。

そんな穏やかな集落地で2人の少年が調理場で与えられた仕事をこ

なしていた。

「ラビー！火つけて」

「おう！レミイその薪に火つけてくれ」

レミイという小さな精霊が指をパチンとならすと薪に火が灯る。

「できたぜユーリ！」

「ありがとう！」

やっぱり火は暮らしに欠かせないね。

僕のラムも欠かせないけどさ。」

「水がないと生きれないからな。」

2人は喋りながらも慣れた手つきで食材を切り分ける。

2人のうち、ラビと言われる少年はやや明るいオレンジ色の髪をしており、背丈は標準よりも高めだった。

ラビの頭の上にはレミィという文庫本と同じくらいの大きさの火の精霊が乗っていた。

その姿は幼女というにふさわしい。笑った顔は小悪魔に似ていたが、どこかに愛らしさが伺える。

一方もう一人のユーリという少年はラビよりも小柄で、薄茶色の髪とそばかすが特徴的だった。

ユーリの肩越しにいるラムという水の精霊は大人しそうな風貌の少女に見えた。

大きさはさほどレミィと変わらない。

4

「まったくクロスの奴、薪取りに行くって言ってから帰ってこないな」

「サボってたりして」

不機嫌なラビの声とは裏腹にユーリは笑って答える。と外から足音がし、ようやくかというようにラビはドアを開けてやる。

そして薪を抱えた黒髪の少年が入ってくると、すぐさま頭を下げ口を開く。

「ごめん遅くなった！」

「遅いぞクロス！  
罰としてそのじゃがいも全部皮剥きな」

「…多すぎじゃないか?!」

クロスが指差した樽には樽一杯のじゃがいもが入っており、とても一人では剥けない量だった。

「冗談に決まってるよねラビ!

それよりさ遅くなったのには何か理由でも?」

「だよな。

いや、森の動物たちの様子がおかしくてさ。妙に慌ただしいっていうか…気になって」

異常だった。

色んな動物たちが森の中を走り回り、隠れ場所を見つけていた。

まるで何かから逃げるように。

「ふ〜ん…まあ気にしなくてもいいんじゃないね?

そんなことよりお前はもっと気にすることがあんだろ」

クロスに近寄り、勢いよく肩を叩く。

バシンと小気味良い音が響くと同時にクロスの眉がひそむ。

「そうだよクロス。早く『セトラ』と契約しなよ」

ラビとは反対側からクロスの顔を覗き込む。

「…余計なお世話だ。俺はそんなものいらぬ。何度言われても変わらない」

わずかに怒気を含め、2人にそう言い放つと泡を吹いている 鍋のほうへ移動する。

そんなクロスを見て2人はしょうがないと言った風に顔を見合わせるのだった。

そして鍋の具をかき混ぜながらクロスは過去に想いを馳せていた。

『セトラ』なんていないほうがいい。

いたから母さんと父さんは死んだんだ。

大体この国がおかしいんだ。何で国民はみな10才になるまでに『セトラ』と契約しないとイケないんだ。

訳わかんねーし…。

ガルシアの中で唯一俺だけ契約してないからみんなにも早く契約しろってうるさく言われるし…。

別に『セトラ』がいなくたって生きていける。

「…そんなものいらないんだよ」

小さく呟いたその言葉は他の2人に届くことなく消えさったのだっ  
た。

ガルシア周辺にある豊かな森の中心部には泉があった。

ガルシアの人々はこの泉の水を飲んで生活しており、日々水汲み  
の担当が決まっていた。

「料理の次は水汲みか…」

クロスは樽を積んだ荷車を引きながら森へと進んでいく。

慣れたんだ森は自分の家の庭のようで迷うことなく泉へと向かう。



15分ほど森の中を進めば目的の泉が見えてくる。  
水面は日の光を反射し、キラキラと美しい輝きを放つ。

「…なんだアレは…？」

水面の反射した光でなくもうつひとつ違った光が存在しているのに気づく。

よく目を凝らせば球状の薄い膜のようなものの中にだれかがいる。

正直怖い…。

得体の知れないものほど怖いものはない、でも…。

恐怖よりも好奇心が勝り、クロスはゆっくりと泉に近寄っていく。

距離が徐々に縮まっていくと同時に得体の知れないものの正体が明らかになっていく。

「…女の子！」

中には金色の美しい髪を持つ20前後の美女が眠っていた。

こんな綺麗な人見たことがないとクロスは思わず目を奪われてしま

う。

「…そなた…わらわが見えるのか？」

「うえっ?!」

眠っていると思っていた美女が突然喋りだしたため驚いて声の上擦る。

美女を見れば美しい深蒼の瞳と目が合う。

その瞳は吸い込まれるように美しく、とてもまっすぐだったので目をそらすことが出来なかった。

「…見えているようだな」

クロスの返答がないことに渋り、先に美女が口を開く。

「…こんなところで何してるんだよ？  
ていうか…何者だよ」

「それをそなたに話す理由はない。

それよりもそなたガルシアの民だろう？早くみなを引き連れ逃げた方がいい」

「!…どういうことだよ？」

突然何いつてるんだこの人は…。

嫌な汗が背中を伝うのが分かる。  
体が小刻みに震え始める。

「じきに帝国軍がガルシアに攻めいる。竜狩りにな」

その言葉を聞き終わった時点でクロスは猛スピードでガルシアへと  
引き返す。

それを見ていた美女は球状の膜を消し、水面に降り立つ。

「…あの者面白いな」

口角をあげ、ある方向を見る。

「…血生臭いのがやってきたか」

一方クロスは何度も転けながらも必死で森の中を走り続けていた。そしてガルシアに戻ると乱れた息を整え、大きく息を吸い込む。

「みんな！！帝国軍がガルシアに迫ってる！！」

「何だ何だ?!」

「帝国軍がガルシアに?!」

すぐさまみんなが外に集まり出す。

「本当なのかクロス?!」

「ああ。森で会った女の人に教えてもらった。それだけじゃない！森の動物たちが逃げたのはそれを予知していたからだと思うんだ！」

クロスの訴えにみんなが言葉を失う。

前者は不明にしる、後者の動物については今までなかった事態だ。

「…逃げよう」

「逃げるっ たっ てどこに?!」

と話し合っていると大きな音が聞こえてくる。

それは地響きとなり、確実にこちらへと近づいていた。

一人の男が高台に登り、その正体を確認すると慌てて降りてくる。

「てっ…帝国軍だあっ…!!」

その言葉にみんなが息を呑み、愕然とする。

「やっぱり来たのか…」

クロスはただ静かにこれから起こる戦いを予感していた。

つづく

## 壊された平和

逃げる暇などなく、目前に帝国の旗を掲げた軍隊が迫っていた。

銃や兵器を持ち、多くの『セトラ』を引き連れた軍隊の姿はガルシアの人々に恐怖を与える。

ただ立ち尽くしたままのガルシアの民を見て、帝国軍の隊長である2人の男が馬から降りる。

一人は王子のような風貌を持った細身の美男で白い隊服に身を包んでいた。

それとは対象的にもう一人は体格が良く、ワイルドな男に見えた。

着ている黒い隊服は無造作に破れ、背中に身の丈を越える大剣を携えているのが特徴的だ。

「おいカミル。本当にこんなしけた場所に竜がいんのか？」

背中に背負っていた大剣を地面に置けばすごい音をたて、地面がへこむ。

「さあね？でもまだここは調べていない土地だからね。もしかしたらいるかもよ…レッド？」

怯えているガルシアの民を見て微笑む。

「まあいい。」

ガルシアの民たちよ！これよりこの土地は帝国軍のものだ！」

レッドの言葉にガルシアの民の表情が一変する。

「…っ何で帝国がガルシアを…！」

「ここは俺たちの土地だ！」

一部の民が反論し出すとカミルの口元が弧を描く。

そしてカミルの背後から成人女性と変わらない姿の精霊がでてくる。

「何だアレは…。」

見たことのないセトラに困惑していると

「シエリル。彼らに熱い抱擁を」

シエリルと呼ばれたカミルのセトラがその言葉を合図に身に炎を纏い、炎翼を出す。

途端、シエリルが姿を消すと

「ギイヤアアアツ！！！！！！！！」

断末魔のような悲鳴が響き渡る。

「なっ…！！」

目を疑うような光景だった。

反論した民の一人が炎の精霊に抱擁され、一瞬にして跡形もなく消え去ったのだから。

それを見て女子供たちは泣き叫ぶ。

大の男たちですら何も言えず立ち尽くしていた。

「ああ…やはり命とは儚いものだね。一瞬で跡形もなく消えてしまっ  
う。」



「それが好きなくせに何いってやがる変態。」

恍惚とした笑みを浮かべるカミルに言い放ち、大剣をガルシアの民に向ける。

「これで分かったろ？俺らは本気だ。死にたくねえなら逆らうな」

みな何も言わなかった。

いや、あんな光景を見たからこそ言えなかったのだ。

そんななかクロスだけは違った。

「…待てよ」

「ん？何だガキ死にてえのか？」

何て威圧感に満ちた眼力なんだ…。

でもここで何もしなかったら俺たちの居場所はなくなるんだ！

逃げ腰になりそんな自分を奮い立たせるように拳を握りしめる。

「ここは俺たちの家だ。

お前たちの好き勝手にはさせない！」

「ほう……。ムカつくくらい真っ直ぐな目してんじゃねえか。潰したくなるな。なあゼフよ」

地響きと共に隊士たちの後ろから岩の鎧を纏った巨体がやってくとレッドの横に立つ。

「……ゴーレムか……」

「そうだ。よく知ってるな。

コイツは俺のセトラだ。お前のようなガキなど指1本でコイツは殺すぜっ。」

「……やってみろよ」

近くに置いてあつた棒を構える。

「命知らずな坊やだね。セトラ相手に君のような坊やが勝てるわけないだろう？燃やしてしまいたいよ。」

「このガキはおれがやる。」

おいガキ！セトラはどうした？」

「…そんなものはない！」

そしてゼフに向かうが拳を向けられると棒は真っ二つに折れ、クロ  
ス自身も地に打ち付けられる。

「クロス！！」

ラビとユーリが駆け寄ろうとするがカミルに阻まれる。

くそっ…なんてバカ力だよ。

痛む体を何とか起こしていく。

「いいのは威勢だけか？つまんねえな」

「全くだね。ここには強いメトセラもセトラもない。退屈だよ」

シエリルに命じて次々と抵抗する民を焼死させていた。

「！やめろよっ！！！！」

「やめてほしけりゃ俺らを倒してみろよ。」

許せないっ…！！

非力な民を襲うなんて…！これだから帝国は嫌いなんだ！！  
また俺は大切なものを奪われてしまうのか…？

力が欲しい…！！

大切なものを守れる力が…！！！！

熱いものが込み上げると同時にクロスの体から魔力がほとばしって  
いく。

「！このガキっ…何を?!」

魔力がどんどん溢れ出してやがる。

こんな強い魔力どこに隠していた…?!

…コイツは生かしておいたら危険だ！

「くそっ…ゼフ！ガキを殺せ！！」

ゼフがすぐさま拳をクロス目掛けて降り下ろす。

もうダメだとクロスが目を閉じた時だった。

「諦めるのが早いぞ人の子よ」

凜とした声に思わず目を開けると目の前に黄金の髪をもつ美女が細腕1本でゼフの拳を受け止めていた。

「…！お前は…あのとき泉にいた…」

「今はそんなことより奴等の相手が先だ」

冷やかな目で帝国軍を見つめる。

その眼差しは、心臓が震え上がるほどの威圧感があった。

「ゼフの拳を片手で受け止めるとは…女何者だ？」

「フン…」の程度で驚いてもらっては困る」

レッドの質問を無視し、ゼフの腕を掴むと片手で持ち上げ帝国軍のほうへ投げ捨てる。

「なっ…!?!」

信じられねえ!!

この女…セトラも使わずゼフを投げ飛ばしやがった!

あり得ない…何なんだコイツは!!

得体の知れない女に対して恐怖心が芽生え始める。

動けずにいる帝国軍をよそに美女がクロスのほうに振り返り近づく。間近で見る女の顔はあまりに美しく、クロスは目を反らすことができずにいた。

「そなた…力を望むか？」

「…!どうしてそれを…」

困惑したクロスを見て美女が口角を上げる。

「そなたの望み叶えてやるつ。」

そう…これが俺たちの始まりだったのだ。

つづく

## 契約

「そなたの望み叶えてやろう」

美女の懐とした一言にクロスは耳を疑う。

望みを叶えてやろうってコイツ何者なんだ…！？

でも…コイツは信じてても大丈夫って本能が告げる。

確信はないけど…！

「…みんなを守れる力が欲しい！！」

「叶えてやろう。ただしそれ相応の代償がつくぞ？」

「かまわない…俺はそれでも力が欲しい！」

クロスの強い目に美女が一瞬微笑むと目を閉じる。

小さく呪文らしきものを口ずさむのを見ていると途端に地面に魔方



陣が浮かび上がる。

「!…これは契約の魔法陣か?!」

こんな形の魔法陣見たことがない!!

それに契約の魔法陣って…。

コイツ、もしかして…。

「…これよりそなたを我がメトセラとする。

さあクロス、わらわの名を呼べ」

小さく頷くと息を吸い込む。

「至竜サラ。俺のセトラとなれ」

そして2人が魔法陣の光に包まれる。

一方至竜という言葉聞いた帝国軍たちの顔色が変わる。

「至竜だと…?!まさかあの女は最高ランクのセトラなのか?!」

「伝説どおり、人間と変わらない姿をしているんだね…!気づかないわけだ」

竜狩りに来たというのに何たる事だ。

最高ランクの Sランクセトラ『至竜』を捕らえる所か坊やと契約  
させてしまうなんて…!!

契約していないセトラはランクにより違いはあるが捕獲がしやすい。  
反対に契約を交わしたセトラはメトセラとの絆により力が増すため、  
捕獲が困難になるのだ。

ただでさえ捕獲困難だと言われている伝説のセトラだというのに…  
!!

「シェリル！何としても至竜を捕らえるんだ！！」

「ゼフ！つづけ！！」

シェリルとゼフが迫ってくるとクロスも意を決する。

「…サラ！！帝国軍を追い払ってくれ！」

「任せろ」

サラの髪が風に孕むと黄金の輝きを放つ。

「吹き飛ばす…エアーツイスト！」

巨大な竜巻が現れ、シエリルとゼフは飲み込まれる。そして帝国の隊士たちも一人残らず飲み込むと竜巻は消え去る。

辺りは何もなかったかのように静まりかえる。

「…やったのか…？」

気が抜けると同時にひどく脱力感が襲いかかり倒れる。

そんなクロスを倒れる寸前でサラは受け止める。

「…今だけは安らかに眠るとよい」

眠るクロスを見てポツリと呟く。

どれくらい時間が立ったのだろうか。

目を覚ましたら、俺は自分のベッドで寝ていた。

窓の外を見れば夜なのだろう暗かった。

いつもと変わらない風景だ。

でもひとつだけ違った。

「起きたか」

優雅に足を組み、椅子に座る女は紛れもなく、あの時俺が契約したセトラだ。

サラを見て、ああ…あの悪夢のような出来事は現実だったんだと思  
い知らされる。

「……現実か」

悲痛な顔をしたクロスにサラはある物を付きだす。

「そなたが眠っている間にこの住人たちが持ってきたぞ」

「!…これは」

付きだされたのは弁当箱のような箱で蓋を開ければ色とりどりのサンドイッチが並べられていた。

そして小さなメモ用紙が挟まっており、クロスへと一言書かれていた。

「…っ!」

昔から両親のいない俺を気遣ってか、みんな色々気にかけてくれた…。  
血が繋がってもいないのに可愛がってくれた。

あいつらに殺された人たちだって良くしてくれた。

自然と布団を握る力が強くなる。

「…食べないのか?」

「…食べれるわけないだろ…っ」

食欲なんて湧くもんか…。

もう…死んだ人たちとは喋れないし会えないんだ…。

あんなに優しくしてもらったのに結局何も返せなかった。

悲しみに沈むクロスを見てサラはサンドイッチをひとつ手に取ると口にする。

「っ！おい何してんだよ！！」

サラからサンドイッチを取り返そうとするが軽くかわされる。

「…ふむ。初めて『さんどいつち』なるもの口にした。

これは優しい味がするな」

「！」

「今食べないとこれを作った者の好意を無駄にすることになるぞ？」

サラのいう通りだ…。これは俺のために作ってくれたんだ。

ゆっくりとサンドイッチに手を伸ばし口にする。優しい味が口の中に広がるのを感じ、涙がこみあげてくる。

サラは静かに部屋を出るとクロスは一人になった部屋で声をあげて泣く。

ドアにもたれサラはずっとクロスの叫びを聞いていた。

「…優しいすぎる人の子だ。優しいがゆえに脆いところもある。だが…」

その優しさは強みでもある。

…クロスよ。これより起こるだろう戦を前にそなたはどうなる？

泣きつかれた後、しばらく眠りについていたがカーテンから差し込む太陽の光で目が覚める。

「…まぶしっ…！」

顔をしかめているといきなり俺の視界に綺麗な女の顔がドアップで映る。

「ようやく目を覚ましたか。」

「うわっ！？いきなり出てくんよ…！」

後退りして驚いている俺を上から見下ろしているサラは妖笑を浮かべた。

「とつと顔を洗って支度しろ。」

「は？支度って…どこに行くんだよ」

「そっいえば言ってなかったな。」

契約を交わすとき代償を伴うと言っただろう？」



「！」

そついやそんなこと言ってた気がするな…。  
やばい…綺麗さっぱり忘れてた。

「今帝国は竜狩りを行っている。

そのせいで無意味な命が数多失われてるのが現状だ。

わらわはそれを止めるためにここに来たのだ」

「仲間の敵討ちってことか…？」

「まあ…一理あるな」

帝国を止めるって…どうやってやる気なんだ？

まさか…。

「…皇帝を殺すのか？」

サラはそうだと一言を告げる。

愕然とした。

皇帝を殺すなんてとんでもないことだ。

「そなたらのほうが皇帝については詳しいだろう？」

「奴の悪行は見過ごせん。」

「…確かに皇帝の悪政には多くの民が不満を持っているさ。

皇帝の気まぐれだけで一つの集落地の民が残虐されたこともある！

俺の両親も…殺された。両親は珍しいセトラを持っていったんだ。

帝国はそれに目をつけたんだけど両親は渡すのを拒否した。

そして殺されたんだ」

たったそれだけのことだったのに…。

「クロス。何かを守りたいと願うのなら綺麗ごとだけじゃ守れないことを覚えておけ」

「！」

そうだ…。

血を流さずして平和は勝ち取れないんだ。何かを守るためには何かを犠牲にしなきゃいけない。

「…俺、サラについてくよ。  
俺も皇帝や帝国軍には大切なものを奪われた。もうこんな辛い思いをする人が増えちゃいけない。」

「決まりだな。すぐ旅支度をしろ」

そしてリュックに荷物を詰め終わると家を後にする。

静まり返った集落地を抜け、出入り口である門の前に立つ。

「もう…ここには戻れないのか」

胸に熱い想いが込み上げてくるがそれをぐっと飲み込む。

「そなたが生きてさえいればいつでも帰ってこれるだろう？何を異なことを言っている」

「…そうだな」

どつちやら俺のセトラは口が悪いようだ。俗にいつ憎まれ口とこいつやっだな。

だけど刺々しい言葉の中には優しさがあり、不思議と憎めない。

これから俺はとんでもないことをやるうとしてっているんだ。

不安や戸惑い、恐怖。

色んな想いがある。

だけど隣にいるセトラを見ていると何だっつてやれそうな気になってくる。

「さて行くぞ」

「ああ」

そして俺はサラと共にガルシアを後にした。  
首都ツエルニを目指してー…。

つづく

## 旅は道連れ

ガルシアを後にした俺たちはカンナギ平原を歩いていた。

真っ直ぐに続くなだらかな道には四季折々の草花が咲き誇り、見るものを魅了させる。

もちろんガルシアから出たことのない俺にとって外の世界は全てが新鮮で、ドキドキしてしまう。

「そんなに物珍しいのか？」

キョロキョロしている俺を見てかサラが話しかけてくる。

「ああ。ガルシアの近くの森にはこんな花はなかった。

外の世界は知らないものがいっぱいあって楽しいよ」

「ふつ。確かに知らないことを知るのは楽しいな。

だがそんなにはしゃいでいると転ぶぞ」

「子供じゃないんだから転ぶかよって…うわっ！…！」

言い終わるが否やクロスは小石につまづき転ぶ。

「やはり子供だな」

ニヤリという効果音が似合う笑みを浮かべ、俺を見下ろす。

悔しいが反論できない。

とりあえず立ち上がり服の汚れを放っていると突如サラの手が首に伸びてくる。

そしてキラキラした金色の何かが俺の首に下げられる。

「これは？」

「わらわの鱗だ。」

「鱗?!」

「それには魔力が宿っている。

子供のそなたには護身用のお守りとして必要だろうか?」

「一言余計だ。

それにしてもこんな鱗1枚にも魔力が宿ってるのか。」

竜ってやっぱりすごいな。

そう実感しながら貰った鱗を大事に服の中にしまっ。

「それよりも…気づいているか？」

「ん？ああ…気づいてる。俺らのあとをつけてきている2人組のことだろ？」

そう…今も草葉の影からこっそり覗いている。

本人たちは隠れているつもりだろうがバレバレだ。

「…何やってんだよラビ、ユーリ」

まさか名前を呼ばれるとは思っていなかったのか2人はドキッとしまっ。

「や…やぁクロス。奇遇だねアハハ」

「…今日はいい天気だなハハハ…」

慌てる2人を呆れた目で見てみると2人もそれに気付いたのか笑っのを止める。

「…わりい。勝手に後つけてきて。」

「でも僕らクロスのが心配で…。」

「…。」

色々と言いたかったが2人が俺のことを思ってくれているのを知っていたから、何も言えなかった。

「…皇帝を止めに行くんだろ？」

俺たちも一緒に行く！」

「クロス一人が背負わなかったっていいんだよ？  
僕らは友達じゃん。ずっと一緒だよ。」

2人の真っ直ぐな想いに胸が熱くなる。  
だけど俺は…

「複雑そうな顔をしているな」

「！」

「友ならばいつだって真っ直ぐに向き合っべきだ。」



「そう…だな。」

真っ直ぐ2人を見据えると

「俺は…2人を戦いに巻き込みたくないんだ。

危険な目に遭わせたくない。

だから何も言わずに出たんだ。」

「知ってる。クロスがそういう奴なのもさ。」

「だけど僕たちだってクロスが危険な目に逢うのは嫌だよ。  
ただ待っているだけなのも嫌だ。」

僕らはただクロスといたい。

いつだって隣を走っていたい。

たくさん考えてその答えに辿り着いたんだ。

しばらく沈黙が続いているとそれにしびれを切らしたのか隣から凄まじい視線を感じる。

そろそろ覚悟を決めよう。

「わかったよ。  
一緒に行こう。」

でも危険な旅になるぞ?」

「分かってるよ」

「何とかなるぞ!」

それに最強の至竜様もついてるんだしな」

「そつだな...」

確かに最強の竜がついてはいる...が。

「そうと決まったなら先を急ぐぞ。」

空に向かい口笛を吹くと数秒もしないうちに上空から複数の生物が降り立ってくる。

「なんだ!？」

現れた生物は丸々とした猫のような姿をしていた。

触ってみると妙にフワフワしている。

あまりの気持ちよさに何度もつついていると気に入らなかったのか「にゃ〜」と不機嫌な声で鳴かれる。

「何をしておる？」

早く精霊たちの背に乗れ。」

そして俺・サラ・ラビ・ユーリは一人ずつ精霊の背に乗る。

「出発だ」

サラの一声に4体の精霊たちがゆっくりと上昇し、飛んでいく。

「スゲー!!」

「うわぁ高い!!」

「サラ。この精霊たちは一体…?」

「そなたらと出逢う前に知り合った。  
今ではわらわの力になっている」

「へえ…至竜の力?」

「まあ…」

大抵の精霊たちはわらわに従うな。  
セトラもAランクまでは基本従うな」

「すごいな」

「なあなあ今さらだけど俺セトラランクについてよく分かんねえ」

「あ。僕も。」

「そなたらそれくらい知っとけ」

呆れた眼差しで2人を見る。

「セトラは強い順からS・A・B・C・D・Eランクと別れている。

」

そう言いながら指をパチンとならすと宙にピラミッドのような図式が浮かび上がる。

分かりやすいようにしてくれたんだろう。

何だかんだで優しい奴だと俺は思う。

「Eランクは粒子精霊が属する。粒子精霊とは精霊の欠片だ。

分かりやすく言うと粒子精霊が数体集まると火の精霊になったりする。

精霊はみな粒子精霊から生まれるのだ」

「なるほど」

「Dランクはドワーフやゴブリンなどの下級精霊。

Cランクは火や水など属性を持つ中級精霊を言う。そなたらのセトラはこのランクに属する」

「へえレミイもラムもCランクか」

「Bランクは中級精霊よりも遙かに上の力を持つ上級精霊のことをいう。

イフリートなどがこれにあたるな。あと天使や悪魔、サキユバスなども含まれる

Aランクは大天使、大悪魔、フェニックスやユニコーンそして亜竜などがあたる。」

で最後のSランクは至竜のみが属する」

「亜竜って何？至竜とどう違うの？」

「決定的な違いは至竜のほうが亜竜に比べ全能力が高いことと姿だろっつな。」

至竜は意のままに人の姿のなれるが亜竜はなれぬ」

「竜も種類があるんだね」

「でもこうしてみると…やっぱりクロスすげーな！！」

至竜様をセトラにするなんてさ！」

興奮を抑えきれず叫ぶ。

「…まあ歴代でも至竜がセトラになった例なんてないからな。」

帝国が狙うのも分からない気はしない。

「至竜様に会えるなんてついてるな」

「…その至竜様って呼び方はやめる。わらわのことは『マナ』と呼べ」

「『マナ？』」

「名前はサラだろ？」

「名を読んでいいのは特別な者だけだ。それ以外は通り名で読んでもらっている。」

竜は名を軽く扱われるのを嫌うからな。特別な者にしか呼ばせない。それほど名を重く扱う。

「わかったよマナ！」

「それならよい」

「…やっぱり竜って上から目線な発言多いな」

「上から目線な発言は実際にわらわのほうこそなたらより遥かに年上だからだ。」

「わらわから見ればそなたらなど赤子同然だ」

「妖笑を浮かべ俺を見てくる。」

「くそっ返す言葉が見つからない。  
見事に言い負けてしまった。」

「して猫たちよ。」

「もっとスピードあげてよいぞ？」

「この者たちを気遣わなくても大事な」

「猫精霊たちにそう告げると途端にスピードが上がり、落っこちそうになる。」

「しかし見えない力がそれを防ぐかのように纏わりつく。」



「おいサラ…!!」

「落ちる心配はないから安心しろ」

「そんなことは分かってる!」

「ならばこのまま飛ばすぞ」

「」「うわぁ〜!!!!!!!!!!」

そんなこんなで俺たちは帝都に向かうため、まず一番近い町『アトス』を目指す。

無事にたどり着けるのだろうか…??

つづく

## 至竜と虹竜

「見えてきたな」

平原を抜ければ目前には町が広がっていた。

「…ようやく着いたのか」

「やった〜…」

「もうダメだ。一刻も早く大地を踏みしめたいい…」

「何ゆえそんなにやつれている？」

「「「サラ（マナ）のせいだろ・でしょ！…！」「」」

猫精霊たちの暴走とも言えるハイスピードに数時間耐えたため、  
人はへとへとだった。 3

一方サラだけは普段と変わらず、ケロリとしていた。

猫精霊たちと別れ、久々の大地の感触を踏みしめる。

やっぱり地上のがいいな。

とか思っているトラビが声をあげる。

「おい何だあれ？アトスの上に何かあるけど。」

見るとアトスの上空には巨大な黒い雲が広がっていた。

その影響か、町全体が暗く感じる。

「雨雲か…？」

「雨雲じゃないってラムが言ってるよ」

「水の精霊が言ってるんだからそうなんだろうな。じゃああれは何だよ？」

悩む俺たちをよそにサラは静かに雲を見つめていた。

そして俺たちはアトスの門をくぐり中へと入っていく。

町の中は大雨だった。そのせいか人氣がなく、雨音がやけに響き渡

っていた。

ラムの魔法で雨に濡れないよう薄いヴェールが張られる。

しばらく町の中を探索するがどうもおかしい。

違和感がまとわりつく。

「…なあおかしくないか？何でこんなに人気がないんだ」

「僕も同じこと思った。

どこの家を見ても灯り一つ付いていない。宿屋だって閉めきってるし…おかしいよ。」

「何かあったのかもしれない…。」

どうしたらいいかわからず立ち尽くしていると、サラがある建物を見つめていた。

「この建物に人がいるようだ。入るぞ」

そう言いながら固く閉じられていたドアをいとも簡単にこじ開け、中に入っていく。

その光景をみて呆気にとられるが3人も慌てて後を追う。

中に入ると灯りは付いてなかったが目をこらすとカウンターがあった。

どうやら飲食店のようだ。

暗い…。

まだ暗闇に慣れない目で辺りを見回していると、殺気を感じる。

とっさに横によけるとさっきまでいた場所に金属音が響く。

おそらく刃物が突き刺さったのだろう。

「やれ!!」

男の声が響くと同時に灯りがつき、突然の光で目がくらむ。その隙をつくように複数の人々がセトラをけしかけてくる。

「くっ…!!」

反応できずにいると、

「動くな」

慄とした声が店内に響き渡るとセトラたちの動きが止まっていた。

「おいどうした?!」

「何をしているの?!」

思いがけないセトラの行動に驚きを隠せず、慌て出す。

おそらくセトラたちはサラの命令に従ったのだろう。

助かった…。

「わらわたちはそなたらに危害を加えにきたのではない」

「…よく見たら子供ばかりじゃないか」

「確かに…帝国の兵士じゃないな」

「悪かったよ」

そして町の人たちはお詫びとして俺たちに手料理をふるまってくれた。

「さつき帝国と言っていましたけど何かあったんですか？」

「ああ。先週から帝国軍が竜狩りをここで行っているのさ」

その言葉を聞きみんなの表情が変わる。

「ここでも竜狩りが…。」

「俺たちガルシアから来たんですけどそこでも竜狩りがありました。」

「ガルシアもかい？帝国の奴ら好き勝手しやがって。」

「町にいた竜は連れていかれたんだ。俺のリザードもアイツらに…」

「そうなんですか…」

帝国軍め、ここでも同じようなことをしているのか…！…！

込み上げる苛立ちを押さえる。

「…竜狩りにあったと言っていたがここには竜がいるな」

今まで口を開かなかったサラが呟く、と。

「ピィ」

水色の小さな竜が奥から出てくる。

「ミル！」

その竜を追って一人の少女が前に出る。  
少女は可愛い顔立ちをしており、赤茶色の髪がさらにそれを引き立てていた。

「ピィ」

ミルと言われた竜はサラにすり寄り、甘えていた。  
サラもそれを拒むことなく受け入れる。

「ほう虹竜の子か。」



「虹竜？」

水色の体で目はサファイアブルーか。

綺麗な竜だな…。

「あなた…どうしてミルがいると分かったの?!」  
少女は警戒しているように見えた。

「落ち着けナタリー。」

「落ち着けていうほうが無理よ!!」

だってこの人たちあの雨の中を歩いていたのよ?!  
ただ者じゃないわ!!」

「…言っている意味が分からないんだけど?  
雨の中を歩けたのは友達のセトラの魔法を使ったからだ」

だからこそ濡れなかった。  
なぜそんなことをコイツは言うんだ?

「この町に降ってる雨は帝国軍の将軍が作った魔法よ。雨に濡れれば魔力を奪われ、衰弱する。その精霊はCランクセトラでしょ？ あの上級魔法を防げるわけない」

「！」

そんな魔法だったのか？！

じゃあ俺たちは何で無事なんだ？！

まさか…！

サラの方を見れば俺の視線に気づいたのかニッと笑う。

「あの雨雲は水と雷の複合魔法だ。

複合魔法はBランクセトラ・メトセラからじゃないと使えない。

しかも町一つという広範囲に及ぶ複合魔法はBランクでは無理だ。

Aランクがやっているんだろう」

やっぱり魔法の件も全部知ってたんだ！

ていうことは雨の被害に遭わなかったのはサラの仕業か！

悔しげに視線を送るとサラは満面の笑みを浮かべる。

「どうしたの？」

答えに詰まってるってことはやましいことがあるんじゃないの?!」

くそっ… やましいこと（サラのこと）があるから言えないんだよ。  
どうしたらいい…?!」

「… かつ彼女は大天使なんです！」

答えに詰まってる俺にユーリが助け船を出してくれる。

「大天使…？」

確かに… 見た感じ天使みたいに綺麗だけど、恰好が違くない？ 天使はみな白い装束でしょう？」

サラが身に纏っている青い踊り子のような衣装を指摘する。

そうきたか…！

なかなか疑い深い女だな。

「天使だっていつも同じ服は着ないのさ。たまには違う服だって着

る。」

「…そうなの？」

ナタリーがサラに意見を求める。

「…そうだな。たまに違う服を天使は着ているな」

「…わかったわ。そういうことにしとく」

ナタリーの尋問が終わり、ようやく一息つく。

「町の中心にあった黒い塔に帝国軍がいるだろう？」

「サラ…そんなことまで知ってたのか?!」

「当然だ。臭いでわかるからな」

「天使って鼻が利くのね…」

「?ああそつだな。それよりあの塔はなんだ?」

危ない発言は注意しないと…サラが至竜だとバレたら面倒だ。

「あの塔は帝国軍が建てたの。」

竜狩りで捕らえた竜たちを収集しているわ。

頂上には将軍がいるみたいでそこから雨を降らしているって噂よ。」

「その将軍を倒せばこの町も元通りになるさ!」

「だな。」

「行こうよ!」

すぐさま席をたち、出発しようとするとなタリーに止められる。

「何バカなこといつてるの?」

将軍を倒すなんて無理よ!将軍にたどり着く前に兵士たちにやられるわ!」

「そんなのやってみないと分からないだろ?」

「!」

「俺たちは皇帝を倒すために旅に出たんだ。帝国軍の悪事を見過」

せない。」

「…っ！」

そんな強い目で見つめられたら何も言えないじゃない…。

観念し、クロスたちに道をあける。

「…私もついてくわ」

「は？」

「私もついていくって言うてるの…！」

私だって帝国に恨みの…っや…っあるわよ…！」

「…どうすんだクロス？」

「はあ…。分かったよ一緒に行くっ」

「うん…！」

「おいサラ他に隠してることないか？」

「隠す？人聞きの悪いことを言うな。  
わらわは聞かれなかつたから言わなかつただけだ。  
隠してたとは違う。」

「…ひねくれてるな」

「何とでも言え」

そう言って笑うアイツはやはり余裕で悔しいからもつと言おうかと  
思ったが勝てないからやめた。

…今度からはちゃんとサラに聞こう。

そして同行者が増えたところで塔を目指し、5人は宿屋を後にする。

つづく

## 黒い塔と雷雲

雨のなかを歩き続けた俺たちは目的地である黒い塔の目前まで来ていた。

「見張りは兵士が4人か…」

兵士たちの死角からコソつと顔を出し、周囲の状況を確認していた。

「クロスどうするよ？正面突破で行くか？」

「…見たところあそこしか入れるとこないし…、正面突破だろうな。」

問題はどうかやって正面突破するかだな。  
どうしたらいいだろうか…。

「ここは私とミルに任せて。」

ナタリーが前に出る。



「ミル。」

「ピィ！」

ナタリーが声をかけるとミルが口を開ける。

すると兵士たちが次々と倒れていく。

「何が起きたの？」

「さあ？」

「俺も分らない」

ユーリとラビ、クロスの頭の上には？が浮かんでいた。

そんな3人を見てナタリーがフウっとため息をつく。

「超音波よ。人間には聞こえない微量な音であいつらに幻術をかけたの」

「確かに訳わかんねえこと言いながら寝てるぜ」

ラビが倒れた兵士の顔を覗き込む。

兵士は苦痛な表情を浮かべ、「俺の分身が潰された！助けてくれ！」  
だの言っていた。

「幻を見ているんだから当然よ。さっ行きましょう」

「ああ」

なんて幻見せてんだよ…などと言えず、ナタリーの後にクロスたちが続く。

サラはというとミルと一緒に少し距離を置き歩いていた。

「…そなたはナタリーが好きか？」

「はい」

「そうか。好きなのだな。」

「はいはい！」

サラに擦りより甘える。

その光景をナタリーは訝しい目で見ていた。

もちろんサラもその視線に気づいており、ナタリーと目を合わせる

と妖笑を浮かべる。

「…ねえあなたのセトラってなんか腹立つわね。」

「うあ?!」

当然話しかけられ俺は声が裏返ってしまっ。

しかも腹立つって…。サラの耳に入ったら殺されるぞ。

「まるで全てを見透かされているような感じ。お前では絶対に勝てないと言われてるみたい。」

「…まあそうっいう感じがするかもしれないけどサラは悪いやつじゃないぞ?」

「そうだよ。」

「マナは何だかんだで優しいからね。」

「ユーリの肩に乗っているラムも頷く。」

「…そう…なのかもね。ミルが私以外の人に心を開いてるの始めてみたもの。」

「マナはいい奴なのかもね。」

そして無機質な回廊を抜けると大きなフロアにでる。

フロアは吹き抜けとなっており、螺旋階段が頂上に続いていた。

「この階段の上に将軍がいるんだね」

「ええ。行きましょ」

階段を登ろうとしたときだった。

「将軍のところには行かせないぞ」

兵士たちが次々と現れ、周りを囲む。

「マジかよ。」

階段にも兵士たちがいる。

完全に逃げ場を封じられたな。

みんなが背中合わせになり、身を寄せ合う。

「まさか女子供がこんなところに忍び込むとはな。」

「俺たち帝国軍もバカにされたもんだ」

腰に携えていた細い剣を抜く。

他の兵士たちも次々と銃やら剣を構え始める。

戦うしかないと悟ったクロスも剣に手をかける。

「動いたら殺すぞ」

銃を向けられ、とっさに手を止める。

「大の男が女子供相手に集団で脅しかよ……。恰好悪いな」

「何だと！」

「やめろ。安い挑発にのるな」

一人の兵士が逆上するが仲間の兵士が止める。

くそっこのまま逆上してくれれば隙ができたかもしれないのに。

苦虫を噛み潰すような表情をみて策が尽きたと感じた兵士たちがゆっくりと近づいていく。

一歩一歩距離が縮められ、あと数歩で触れる距離になった時だった。

「ミル！幻術よ」

「ピィー！」

広範囲に幻術をかけ、次々と兵士を戦闘不能にしていく。

「攻撃しろ！」

「ラム！水壁だ」

「レミー残ってる兵士たちをやっつける！」

向かってくる銃弾をラムが水の壁で防ぎ、レミーが火で矢を作り、攻撃する。

その隙にみんなが階段を駆け登っていく。

「…なんでサラだけ何にもしないんだよ。」

「わらわが相手する必要性がなかったからだ」

コイツ、さも当然だと言わんばかりに言いやがるな。

腹が立つというよりも呆れたというべきか。

それ以上つっこまず、バカ長い階段を走ること集中する。

が、すぐ後ろを走るナタリーが声をあげたため集中力が途切れる。

後ろを振り返るとナタリーがミルを抱き抱え困惑していた。

「！」

ナタリーの視線をたどれば向かいの壁から男が上半身だけを覗かせていた。

「あれ何?!」

「魔法の一種か?!」

始めてみる魔法にみんなが驚く。

「…女子供しか居ねえのに殺すこともできねえたあ情けねえ」

ズルズルと壁から下半身も出していく、黒の長いコートをつなびかせ階段の上に着地する。

左腕には銀色の勲章がつけられており、雑兵でないことが分かる。

「…アイツよ…! アイツがヴォルツ將軍よ!!」

「ああそつだ。俺様が暗殺のヴォルツだ」



ニタツと笑みを浮かべた瞬間ヴォルツの姿が消える。

あまりの速さに目が追い付けず、すぐさま周囲に注意を向ける。

「口を閉じていろ」

突然襟首を捕まれ、体が横に倒れだす。

サラに捕まれたんだと認識した瞬間、ヴォルツが壁から現れ剣を振り下ろす。

幸いにもクロスはその場を離れていたため攻撃を受けずにすんだ。

しかし有り余った剣の威力は凄まじく、階段の一部を破壊してしま  
う。

途端に亀裂が入り、みんなの足場が崩れ体が宙に投げ出される。

「うわあああっ！」

「きゃあああっ！」

段々と近づく地上を見て待ち受ける激痛を想像し、固く目を閉じる。

「！」

突如体が浮き上がり落下が止まる。

「浮いてる…?」

体になにか巻き付いている違和感がある。

これは風か…?!

「クロス。そなたの戦う番がやってきたようだぞ」

優雅に着地するとみんなも地上に下ろしてやる。

「…俺だけじゃなくてサラもだ。行くぞ」

剣を抜き、まっすぐに構える。

「…フン。俺様に勝てるかとも思ってるのか？  
バカな奴らだ。」

「やってみないと分からないだろ！」

そしてサラがクロスの体に風を纏わせるとたちまち体が軽くなる。

地面を蹴りあげ一気にヴォルツの懐に入り込む。

「！」

間一髪でクロスの剣を受け止めるがすぐに次の攻撃が繰り出されるため押されていく。

俺様がこんなガキに押されているだど？！

ありえねえ！！

力任せにクロスをなぎ払うと壁の中へと潜り込む。

「逃げ込まれたか！」

「どこ見てんだ！」

色んな方向から攻撃を仕掛けられ今度はクロスが押されていた。

「くっ…！」

攻撃しようとしたら壁の中に逃げられる…！  
これじゃ体力が消耗するだけだ。

「あの魔法どうにかならないのか？」

「物質透過魔法か？あれには致命的な弱点がある。」

「弱点って何だよ！」

「少しは自分で考えろ」

「この状況下で考えられるかっ…！」

今にもやられそうなのに考えられるか！  
他に意識を持っていけば確実にやられる…！

「ふう。仕方ないな」

そう言ったサラが壁へと右手を這わせる。

「女…今更何する気だ？」

壁から顔を出しサラを見る。

「エアーツイスト」

サラが魔法を発動させると巨大な竜巻が内側から塔を破壊していく。

凄まじい音をたて瓦礫やら何やらが降り注ぐが風に守られ、被害にあうことはなかった。

そして瞬く間に塔は全壊してしまう。

「ぐおおおっ！！！！！！」

ヴォルツは全面的に攻撃をくらい瀕死の状態だった。

体は血まみれで四肢は切断され、立ち上がるのも困難な状況だ。

「物質透過魔法はその物質と一体化するゆえに物質のダメージは己のダメージとなる。」

それが物質透過魔法の弱点だ」

「くくっ…ハハハっ!!!やるな!  
だがコイツはどうだ?!!」

ヴォルツの中から大悪魔が現れるとサラのほうに向かう。

「大悪魔?!気をつけてAランクセトラよ!!!」

ナタリーの心配をよそにサラは一瞬で間合いをつめ地面に叩きつける。

「!」

「Aランクではわらわには勝てぬぞ?」

「なっ…何なんだてめえは!!!」

俺のセトラを一撃で倒しやがった!!  
Aランクセトラだぞ!?!  
まさか…!!!

サラがヴォルツの前に立ち見下ろす。

その表情は影が差していたため読むことはできなかった。

「…てめえ至竜か？」

小さく呟いたヴォルツの言葉に正解と言つように真っ直ぐ見つめる。

肯定と受け取ったヴォルツは目を閉じる。

「…降伏か？」

「こんな体で敵うものか。」

至竜がガキと契約したっつーのは本当だったんだな。

至竜ってこんな姿してんだな。俺たちとなんら変わりねえ。やっぱり強えな至竜って。伝説どおりだ。

俺さっきから至竜のことばっかだな。

そついや俺…至竜に会いたくて帝国軍に入ったんだよな。

強くなれば至竜に会えるってガキの頃から信じて疑わなかった。。

ケツ…今更なんでこんなこと思い出すんだよ。

段々と視界が薄くなり、意識が遠退いていく。

「…」

サラはただ静かにヴォルツを見つめていた。

ああ、最後に至竜に会えてよかった…。

そしてヴォルツは息を引き取る。

その死に顔はどこか幸せそうに見えた。

「…そなたの還るべき場所へいけ」

ヴォルツと大悪魔の体が光に包まれると跡形もなく消える。

「どこへやったんだ？」

「あの者の帰りを待っている者たちのもとへ送った。」



「そっか…。

勝ったのに…なんでこんな気持ちになるんだろうな。」

胸が締め付けられる。痛い…。

「戦とはそういうものだ。勝っても負けても犠牲が出る。

何かを守るためには何か犠牲になる」

「辛いな、そういうの」

アトスを覆っていた雨雲も消え、いつしか優しい陽の光が差し込み始める。

しばらくして町みんなが集まり、破壊された塔をみて歓喜の声をあげていた。

もちろん捕まっていた町の人たちのセトラも無事に帰すことができ

た。

サラの奴、捕まったセトラたちの場所がわかっていたんだろうな。セトラたちを見つけたとき風の匂いがした。

そして俺たちはアトスを後にしたのだけど…

「なんでナタリーがついてくるんだ？」

「だって私も帝国軍には両親を殺された恨みがあるし。それに世界のために戦うなんて凄いじゃない!!」

「はあ…」

「意外にミィハーだね。」

「黙っていれば大人しそうな感じなのにな。」

「何か言った??」

「『『いいえ!』』』」

そんなやり取りを見てミルが喜んでいた。

「そういえば…結局マナは何者なの?! 大天使なんて嘘はもう通じないから!」

クロスに詰め寄る。詰め寄せられた本人は困った顔で頭をかく。

そしてー、

「しっ…至竜?!」

真実を聞いたナタリーは顔を青ざめる。

「あんだどんだけ凄いセトラと契約してんのよ!」

「まあ最強のセトラだからな」

「それもそうだけど至竜はそれだけじゃないわ!

至竜の力は世界を我が物にできるほど巨大なの! だから帝国軍も狙うのよ!」

「あながち間違っではないいな」

「…ミルがあなたになついていた理由が分かった。

ミルが虹竜と分かったのも、今までの色んなこともあなたが至竜だ

と考えるとらつじつまがあうわ。」

ハァーっと大きなため息をつく。

まあ普通至竜なんて考えもしないだろうな。

「一件落ち着いたのだ。早く次の町を目指すぞ」

「ナタリーのことはどうするんだよ」

「わらわはどちらでもよい。

そなたが決める。」

「ふう……。分かったよ。ナタリーも一緒に行こう。」

「うん！」

「仲間が多い方がいいよね！」

「ああその方がいい」

こうして新たに仲間が増えた俺たちは次の目的地をめざす。

U  
U  
U  
U  
U

## 束の間の休み

アトスを後にした俺たちはまたもあの地獄のような思いを味わっていた。

「ちょっと…もう少しスピード落とせないのか?!」

舌を嚙まないよう細心の注意をはらいながら前に行くサラに話しかける。

「…これ以上遅くしてどっしする?」

「充分速いっつーの!?!?!」

俺たちのやり取りを見てか猫精霊が困った顔をする。

「私も無理っ…!?!」

顔色を悪くしたナタリーはミルに背を擦られていた。

「憐れナタリー!」

「高所恐怖症なのにな。。」

「仕方ない。今日はここで一夜を過ごすぞ」

そして俺たちは森の中で一夜を過ごすことになった。

ここら一带は日が暮れるのが早いのか、辺りはすでに薄暗かった。

とりあえずレミーの力で焚き火をおこし灯りと暖の確保を行う。

その後腹が減った俺たちは食料確保のため釣りを始める。

「…なんか出そうだよね」

薄暗く、不気味なほど静かなこの森に恐怖を抱いたユーリが口を開く。

「何ビビってんだよユーリ。何も出ないに決まってるだろ！な、ク  
ロス！」

「…ラビ。足思いつきり震えてるぞ」

「うるせえ！」

「ちよつと真面目に魚釣ってよね！」

「」「すいません」「」

「ふう…でも静かよね。不気味なくらい」

「そうだな。獣の声一つ聞こえない」

何も起こらないといいんだけどな…。

「魚食いつかないな。結構時間立つのに」

「そうだね。大抵の魚はこれで釣れるのにね」



水面から引き上げるが魚は釣れず、お手製のルアーだけがむなしく姿を現す。

ちなみにこのお手製のルアーはユーリが作ったものである。ガルシアにいた頃、3人でよく釣りをした。

このルアーの凄さは知っている。

これで今まで釣った魚は数知れずだからな。

「…暗くてよく見えないけど魚自体がいるのかしら？」

水面をみんなで覗き込むが暗くてよく見えない。

「…なあサラも食料確保手伝ってくれよ」

釣りをしている俺たちの後ろで猫精霊の背でくつろいでいるサラに声をかける。

サラは気だるそうに起き上がると横にやってくる。

「…この川に水棲生物はいないようだ。魚は諦める。」

「…やっぱりいないのか…」

どれだけやっても釣れないわけだ。  
無駄なことをしたな…。

「ちょっと待ってマナ！水棲生物がないってどづいづいこと？」

ナタリーが訝しい表情をしていた。

「そのままの意味だ。魚だけではなくあらゆる微生物や水系統の精霊などがいないんだ」

「それっておかしいわよね？」

「ああ普通に考えれば異常だな」

そう言いながらクロスの肩の上に肘を置く。

「…なんで肘を置く？」

「丁度いい場所にあつたからだ」

反論は許さないと言ってるかのように笑顔を向けられ、精一杯の抵抗として睨んでみる。

「そんな顔しても効かぬぞ？」

むしろ余計弄りたくなる…とは言わないでおこう。

こやつを弄るのは楽しいがやり過ぎるのも大人げないしな。

心のうちでそう思い、川に視線を戻す。

「…普通に考えれば異常だが普通に考えなければつじつまの合う真実が見えてくる」

「…つまり何らかの原因でこうなったってことか。」

「ああ。」

「…そうだ。川の中に手を入れてみる。」

「手を？」

みんなは言われたとおり、川の中に手を突っ込んでみる。

「何か感じるだろうか？」

「うっん…冷たいだけなんだけどな」

「…魔力の断片みたいなものがあるわ…」

「これ水系統の魔法だよ」

「いや…水だけじゃない。氷と複合させた魔法だ」

みんなの言葉を聞きサラはニツと笑う。

「そうだ。水と氷の複合魔法を受けてこの川の水棲生物はいなくなつたんだ。」

ではなぜこの川はそんな魔法をかけられた？なぜ森に獣がない？

そなたはその答えを知っているはずだ」

「まさか…」

サラの言葉にみんなも気付いたのか表情が険しくなる。

「…帝国軍の仕業なのか?!」

「…そうだ。この森には帝国軍の臭いが残っている。」

奴らは目的のためなら何でもやる。  
罪のない命すらも平気で手をかける」

そう言ったサラの目は一瞬悲しげに見えたがまたすぐにいつもの強い目に戻る。

「…この森や川…ここに住んでいた動物や精霊たちのことを想うと  
哀しいわ」

「ピィ…」

「またいつかこの森にも動物や精霊たちがやってくるかな？」

「…ああ。もうやってきているようだ」

サラが指を指すと少し離れた川の水面にユニコーンが降り立っていた。

「うわっユニコーンだ…！俺始めてみた！」

「体が銀色の光を放って綺麗だね！」

「すごく優雅な精霊ね…！」

「ああ綺麗だ」

みんなで見つめているとユニコーンが一瞬お辞儀したように見えた。そして森の中へと姿を消していく。

「今お辞儀しなかったか？」

「私もそう思った」

「…もしかしてサラにお辞儀したんじゃないか？至竜だし」

「…それもあるかもしれないがアレは子供が好きなんだ。特に純粋で優しい心根をもつ子供がな。」

そなたらにこの森で亡くなった命を悲しんでもらえて感謝しているんだろう」

みんなでユニコーンが消えていったほうを見つめ、微笑みあう。

「……………」

アレはこの森の番人なのだろうな。

ならば再びこの森に新しい命を芽吹かせるのはアレの仕事だ。

わらわの力はいらないな。

人知れずそう思っていると静寂な中『ギユルギユルツ』と大きな音が響き渡る。

「…あゝ腹減ったあ!!」

「ホントだよゝ魚も釣れないしどうする??」

育ち盛りの少年少女に絶食はキツイ。

すでに空腹の限界がきているため体に力が入らない。  
このままでは餓死する…そう思っていた時だった。

「そこから離れる」

サラがそう告げると右手を空にかざす。

手のひら大の大きさの光の玉を作ると空に放つ。

光の玉は真っ直ぐに上昇し消えると遠くで獣の鳴き声が聞こえる。

程なくして空から大きな塊が落ちてくるのを視界に捉える。

「…まずいこつちに落ちてくるぞ!!」

慌ててその場から離れると塊が大きな音をたて落ちる。

間一髪だった…。

「…だから言っただろう？離れると」

「離れるだけじゃ分からないだろ！！  
ってというか何仕留めたんだよ…」

落ちた塊を見ると2Mはあろう巨大な鳥が無惨にも白目を向いて横たわっていた。

「鶏肉うう！…！」

ラビが勢いよくそれに抱きつく。

「それはニクドリと言って名前通り補食用の鳥だ。  
1羽いれば充分だろう？」

「「「「「ありがとうサラ・マナ！…！…！」「」「」「」



すぐさまレミーに焼いてもらつと香ばしい匂いが漂う。

ヤバい…よだねが止まらない。

人数分切り分けると頂きますの合図でみんなががつく。

そんな5人を見てサラは小さく微笑む。

そして川に手を入れたときのことを思い出す。

ラビは炎系の魔法には敏感だが水系は疎いようだ。  
しかし魔法の断片を察知できなかった分探知力がない。

ユーリやナタリーは探知力が多少あるようだな。  
そう考えると…

「やはりクロスが一番魔力が強いということだな。」

まあそうでなくては面白くない。

「…次の町はコーデリオか。」

何やら珍しい匂いと気を感じるな。

まあこうして束の間の休みを設けたわけだし…頑張ってもらわないとな。

。...57#N1JJP.57.0

^UJ.U

## 亜竜に呪われた町

ただいま俺たちはコーデリオを目前にどうしようものかと悩んでいた。

なぜかって？

アトスの時みたいにコーデリオからも何やら邪悪な魔力が漂ってるんだよ。

しかも俺たちの横には人間の生首が棒に突き刺ささったものが飾られている。

普通これ見て行きたいなんて思わないよな？

「…なあこれ何なんだ？何の見せしめだ？！か弱い旅人を脅すためにこんなことしてんのか？！」

「ちょっとラビ！苦しいから離れてよ」

ユーリはラビに暑苦しいくらい抱擁を受けていた。ラビの怖がり相変わらずだな。

「酷いわね…。小さいのもあるわ。

きつと子供も…」

「…ああ。」

目はくり貫かれ、耳も削がれ、顔はほとんど認識できない程に焼きただれていた。  
同じ人間だったのかと疑ってしまう。  
正直見るにたえない姿だ。

「…サラ。これも帝国軍の仕業なのか？」

「いや、これは…」

と、言いかけたときだった。

「これは亜竜がやったのです。」

コーデリオの門から一人の男がやってくる。

「亜竜…?!」

「ええ。」

「この町は今亜竜に呪われているんですよ。」

「呪われてるってどういふことですか？」

「…見た所あなた方は旅人のようですね。その年齢で旅をしているといふことはそれなりの腕をお持ちなのでしょう。」

是非町長の屋敷にお出てください。

詳しいお話はそこで致します。」

「…え？」

そして俺たちは男に連れられ、コーデリオの中へと入っていく。

何やら大変なことに巻き込まれたような気がする。  
俺たちどうなるんだろう…。

草花の国といわれるだけあって町の中は様々な草花で彩られていた。

だが異様なことに全て黒い花だった。

広場を抜けると町長の屋敷と思われる建物が見えてくる。

その屋敷は他の家よりも高所にあり、建設費がかかっているように見えた。

「あの屋敷の上が一番邪悪な魔力が強い。」

屋敷全体を黒いモヤみたいなのが包み込んでいる。

一体何が起きてるんだ？

屋敷の中に案内され、赤い絨毯の敷かれた廊下を進むと町長の部屋にたどり着く。

「町長。旅人をお連れしました」

入れと扉の中から聞こえ、男が扉を開け俺たちを中へと入れる。

外見だけじゃなく内装も派手派手しいな。とにかく派手という印象しか残らない。

「おい何だその子供たちは？  
子供ではなく腕の立つ旅人を連れてこい！」

派手な装飾品に身を包んだ小太りの中年男が椅子から立ち上がると俺たちを見下ろす。

「町長。お言葉ですが彼らはただの子供ではないかと思えます。  
こちらの少女はAランクセトラである虹竜と契約してますし。」

「ピイ？」

ミルが自分の話題かと小首をかしげる。それを町長は訝しい目で見  
る。

「…確かに彼女は使えるだろう。」

だが他の少年たちはBランクセトラだ。  
しかもその黒髪の少年と金髪の美女に至ってはセトラと契約もし  
ていないようだ」

ああ、勘違いされてる。



サラはセトラには見えないからな。  
仕方ないといえば仕方ないけど…。

しかしこの町長さつきから偉そうだな。上から目線な感じでいい気がしない。

「よし、彼女は確保しとこう。」

町長がそう言うとナタリーの眉がピクリと反応する。

「待って下さい。」

話が全く読めないんですけど。一体何があったんですか？

「…」

町長は机の引き出しから高級そうな葉巻を取り出し口にすると煙を吹かせる。

「1週間ほど前か。」

亜竜がこの町の付近に現れたんだ。

亜竜は凶暴な性格ゆえか突如この町を襲い始めた。  
我々も抵抗したが亜竜を仕留めることができなかった。

だから旅人の力を借りることにしたのだ。そう…腕の立つ旅人のな  
「！」

「…何だそれ」

「…他人任せだな」

「ラビ！クロス！」

小さく呟いた2人を慌ててユーリが止める。

「…確かに亜竜って獰猛な性格だと本に書いてるわ」

「獲物を定めたらソイツを仕留めるまで追いかけるとかな」

「そう。」

今その獲物がコーデリオなのだ。」

町長が言ってること何か腑に落ちない…。

確かに亜竜は人里を襲うことはある。

だけどそれはあくまでも補食のためだ。

補食のためにこんな魔法を残していくのか？

そんなことを考えているとふと隣のサラが小さく笑う。

「…町長よ。そなたにいくつか問う。

なぜこの屋敷を中心に魔法をかけられている？」

「…それはここがこの町の核だからだろう。」

「まことか？」

獲物を射抜くような視線に耐えられなかったのか町長は視線をそらす。

「…ああ」

「…そうか。ならば率直に聞こう。」

亜竜に恨まれるようなことをしただろう？

「！」

思わず葉巻を落とす。

核心をつかれたからか町長の顔色が明らかに変わっていた。

「何をいきなり言い出すかと思えば呆れた…」

「ほう。しらを切るつもりか？  
わらわには通用せぬぞ？  
この屋敷から亜竜の臭いがする。  
そなた、亜竜の大切なものを奪っただろっ？」

「！っ…追い出すんだっ！！！！即刻ソイツらを追い出せ！！！！」

真つ赤な顔で激怒しだす。  
その様子を見ると凶星なのだろう。

「…言われなくとも出て行ってやる」

サラが扉を蹴飛ばすと扉は衝撃に耐えきれず壊れてしまう。

後ろで町長の悲鳴が聞こえたが知らん顔だ。

サラの後に続き、俺たちも屋敷を後にする。

「なあサラ、町長のやつ…もしかして亜竜の卵を盗んだのか？」

亜竜の大切なものって言ったならそれしかない。  
もし卵を盗まれたのなら、あの生首やこの町に張られてる魔法も納得できる。

「そっだ。

あの町長もバカなことをした。  
よほど死にたいのだろうな」

「ねえこの町に張られてる魔法はどういうものなの？」  
「確かに…こんな邪悪な魔法始めてみるよ。」

大抵の魔法は分かるがどうもここに張られてる魔法は普通とは違う。

「…コーデリオには古代魔法が張られている」

「古代魔法…?!  
古に存在したと言われる禁断の魔法？」

「人間たちの世界では禁断とされているが竜の世界では一般的な魔法の一つだ。」

ちなみにはあれは全てを消滅させる魔法だ。」

「…この町が消えるってこと？」

サラが小さく頷いたのを見て俺たちは息を呑む。

「見る。すでに花は魔法の影響を受け黒くなっている。  
建物だってそうだ。」

そして大きな風が吹くと一斉に花が散る。  
建物もゆっくりだが砂塵となり確実に崩壊の道を辿っていく。

何の罪のない町人たちはどうなるんだ？  
家を無くし帰る場所を失った人たちはこれからどうするんだ？

「…早々に離れるぞ。  
巫竜の匂いが近くなっている。

じきにここは戦場と化す。」

「！ちよっ…このまま見捨てるのかよ?!」

思いがけないサラの言葉。  
女王様だけど困ってる人が居ればなんだかんだ言っ  
て手を差しのべる。

なのにどうして今回はそんなこと言うんだ…？

動揺を隠せなかった。

そんな俺たちをよそに人々の悲鳴が聞こえる。

突如大きな影が蠢くと、3匹の亜竜が町の上を旋回していた。亜竜がけたたましく吠えると町長の屋敷へと向かっていく。

「このままじゃ町が…!!」

「…っ！」

走ろうとしたときだった。  
突如腕を捕まれる。

「忘れたのか？  
そなたが何のために剣をとったのか？」

「…わかってるさ。でも見捨てるなんて…!!」

「そなたは何も分かっていない。  
今亜竜と戦ってもそなたは勝てぬ。  
みすみすここで命を落とすつもりか？」

サラの言う通りだ。  
今の俺じゃ亜竜に勝てるわけがない。  
でもな…。

「俺は…帰る場所があるから安心して旅ができるんだ。」

「！」

「帰る場所が無くなるのは辛い。」

「だからこの町の人たちの帰る場所も守りたいんだ。」

そう告げると人混みをかき分け町長の屋敷へと走っていく。

「待ってクロス！」

「全く…」

ラビ、ユーリ、ナタリーは慌ててクロスを追う。

残されたサラはその後ろ姿を見ていた。

「…いつの時代も綺麗な人間というのはいるものだな」

そうだ…忘れてはならぬ。

何のために剣をとったのか。

そなたは争いで涙する人を無くすために剣を取ったのだ。

ならば例え勝てぬ相手でも立ち向かわなくてはならぬ。



「試すよつでアレには悪いが…な」

小さく苦笑するとゆっくりとクロスたちの後を追う。

町長の屋敷へ着くと散々たる景色が広がっていた。

きらびやかだった屋敷は炎に焼き尽くされ全壊だった。

「ひいひいっ！！！！！！！！！」

突然甲高い声が響き渡る。

声のしたほうに向かうと亜竜に囲まれた町長の姿があった。

町長はあまりの恐怖で腰を抜かし、歯をガチガチと震わせていた。

『八つ裂きにしてやる。』

亜竜が鋭い爪を降り下ろすと、

「やめろ！」

クロスが間一髪剣で受け止める。

『…人の子が我とやりあう気か？』

「…ああ！」

ここまできたらやるしかない！

自分の信念は最後まで貫く！！

つづく

## 亜竜に呪われた町2

心臓の音が妙にでかい。

原因はわかっている。俺の目の前にいる3匹の亜竜がとてつもない殺気を放っているからだ。

手の震えを隠すように強く剣を握る。

『私の邪魔をする奴は殺してやる』

鋭い爪を降り下ろす。

「！」

剣で受け止めるが予想以上に一撃が重かった。

すっかりそちらに気を取られていると他の亜竜たちがクロスめがけて炎を吐き出す。

「！……ウォーターウォール！」

間一髪呪文を唱えるとクロスの周りを水が包み込み炎を退ける。

そして亜竜たちから離れ、間合いを置く。

「スカル」

一時的に身体能力を強化する魔法を使う。

これで少しはまともに戦えるはずだ。

地面を蹴りあげると一気に亜竜の懐に入りこみ剣を横にふる。

『！』

亜竜は少し反応に遅れるが強靱な鱗に包まれていたため傷は浅かった。

「…くそっ…!!」

硬すぎだっつーの！これじゃ攻撃が届かない。  
あの鱗どうにかしないと…。

そう思っていると視界の脇から黒いものが動く。

気づいた時には鋭い痛みと衝撃が走り、体は宙に舞う。

くっ…しっばで攻撃されたのか！

しっばも硬くてめっちゃくちゃ痛いし…！！

空中で体勢を整え着地する。

…剣が届かないなら魔法しかない。

一カ所に集中的に攻撃すれば…！！

「ソーレ…！！」

炎を凝縮した玉を懐めがけて連発していく。  
狙うは先ほど剣で切った部分だ。

『当たるか』

巨大な羽で懷を隠す。しかしクロスも負けじと動き回り、死角から攻撃していく。

「クロス！」

聞き慣れた声だし、声のしたほうを見るとラビたちが遅れて到着する。

「ミル！幻術よ！」

「プイー！」

口を開き、超音波を出すが亜竜たちは何食わね顔をしていた。

「効いてない?!」

Aランク同士でも多少は効果があるはずなのに…!!

『虹竜の子か…。成竜ならば我らに幻術がかけられただろうな。』

『幼竜では話にならん。』

見下すように睨むとその威圧感に耐えられなかったのかミルは後退りする。

「おい町長！亜竜に卵をかえしてやれよ！！」

呆けている町長をラビが胸ぐらをつかみ揺さぶる。

「ばっ…バカを言うな！！！」

「アレは売ればもの凄い高額の金があるんだ！！！」

「バカはお前だろ！！！」

「早く返せ！！！」

「このままじゃ殺されるぞ！！！」

「ラビ！早く卵の在りかを聞き出して！」

「こつちが持たないわ！！！」

クロス・ナタリー・ユーリは必死で亜竜に立ち向かっていた。だが体力も魔力もすでに限界だった。

「はあっ…はあ！」

息するのが苦しい…！！体が重い。

悔しい…！！

弱い自分が情けなくて齒がゆい。

『…茶番は終わりだ。』

亜竜が町長を囲むと町長だけでなく、その場にいたラビも腰をぬかす。

『我の卵をどこへやった？』

「…ここにはもうない！

今頃首都ツェルニに向かっているだろうよ…！」

『…キサマ…！！』

町長の言葉に怒りが頂点に達し、凄まじい魔力が全身から吹き出す。

「くっ…！」

ラビは諸に当てられ、気を失いかけるが気合いで意識を保つ。



反対に町長は気絶し白目を向いて倒れていた。

『許さぬぞ……！！キサマには死よりも苦しい地獄をくれてやる！！  
それだけではない！キサマに関わったものも全て破壊してくれる！  
！！』

鋭い爪がクロスに向かってくる。

もうダメだ……！  
避けられない！

目を固く閉じるがいつまでたっても痛みは襲ってこなかった。

目を開ければきらびやかな金髪が目に入る。

「サラ……！！」

サラが細腕1本で亜竜の爪を受け止めていた。

『……！あなたはもはや……！！』

『女王<sup>マナ</sup>？……！！』

亜竜たちが明らかにサラをみて動揺していた。

「…罪人は一人だろう？無関係な者は巻き込むな」

『…何ゆえ人間を庇うのです?!』

「…これはわらわのメトセラだからな」

『マナのメトセラ…?!』

『正気ですか?!』

誇り高い至竜が人間と契約するなどあり得ない!』

「その大きな目は飾りか？現実を見よ。現にわらわは人間と契約している。」

サラはやっぱりと掴んでいた亜竜の爪を退かす。

そして亜竜はサラが反対の腕に抱えているものを見つけると目を見開く。

亜竜の視線に気づいたサラはああと一言言つと卵の親であろう1匹の亜竜へとそれを差し出す。

「どこぞのバカが卵を乗せた馬車を走らせていたから奪ってきた。」

『…』

「要らぬのか？」

『要ります』

魔法を使い卵を浮かせると大事そつに頬擦りする。

その様子を見てみんなもホッと一息をつく。

これで卵も戻った。

一段落だ。

一気に脱力感に襲われる。

『マナ。こたびの件は感謝致します。』

しかしマナ、我々はあなたの考えが理解できません』

『何ゆえ人間とつるむのか解せません』

『あなたは我々を裏切った。』

あなたにとって今も人間のほうが大切なのですか？』

亜竜たちの目は心なしか寂しげでどこか怒りにも満ちた光を放っていた。

「……わらわにとって大切なものは今も昔も変わらぬ。己の好んでいるものだけだ。」

ニツと不適に笑う。

「とりあえず崩壊した町の修復をするか。」

サラが右手を掲げるとサラを中心に風が巻き起こり、やがて町全体に吹き抜ける。

瞬く間に崩壊した町が元の美しい町本来の姿に戻る。

「さて、この町にもう用はない。  
長居は無用だ。」

指を鳴らすと上空から猫精霊がやってくる。

「でもマナ、町長はどうするの？  
放っておくのか？」

「町長のことは巫竜に任せる。  
煮るなり焼くなり好きにしろ。」

そう言っつて猫精霊の背に飛び乗ると飛んでいく。

「…相変わらず自分勝手だな。」  
「ああ…」

猫精霊が力ない俺たちを気遣い背に乗せてくれる。

ホントいい奴らだ。

『待て人間』

「！」

亜竜に呼び止められ振り返る。

『…いろいろと悪かった。』

思いがけない亜竜の言葉に目を丸くする。

『それだけだ』

「…ああ。」

意外にいい奴らなのかもしれないな。  
亜竜の意外な一面を知った。

そしてサラの後を追って猫精霊たちが飛ぶ。

亜竜たちは見えなくなるまでその後ろ姿を見つめていた。

『…マナは真に我々を裏切ったのだろうか…？』

『分からぬ…』。

マナの言った言葉も…あの噂が真なのかも。』

『…人間だけでない…我々の行く末もどこなのだろうか』

「遅い。何をしておった？」

追い付くなりサラから有りがたい説教をくらう。

「いや…亜竜と話してたら遅くなって。」

「亜竜と？」

ほう…珍しいな」

そして俺とサラはみんなと少し距離をとり前を進む。

「なあサラ…」

何があっただんだ？

『今も昔も人間のほうが大切なのですか？』

亜竜たちの言った言葉が気になる。

おそらく過去になにかしらあったんだ。

「…いややっぱりいい。」

気になるけど今聞くのはよそう。

サラが自分から離してくれのを待とう。



きつと話してくれるはずだ。

「…そうか」

サラは俺の意を察したのかそれ以上言わなかった。

「なあサラ。世界には亜竜たちみたいに強い奴らがたくさんいるんだよな？」

「ああ。そうだな」

「俺はまだまだ弱い。強くならなきゃいけない。」

「どうしたら強くなれる？」

クロスの瞳には今まで以上に強い光が宿っていた。

サラはそれを見て口角をあげる。

「何があっても揺るがぬ信念を持って。

泣いてもいい、負けてもいい、逃げてもいい。

だが己に誓った信念だけは貫け。」

「！」

「一つのことを貫くには強い精神力がいるからな」

「…ああ。

俺もそんな奴になりたい。いや…なるよ」

ニツと笑う。

「…まあ手っ取り早く強くなる方法があるぞ」

「え?!」

そんないい方法があるなら是非やりたい!!

「だがそなたには堪えるかもしれぬな」

「何でもやるよ！…やらせてくれ！」

「…そこまで言つなら仕方ないな。」

その方法だが…わらわと組み手するのだ。」

「は？」

何?!

今サラの奴何て言った？

俺の聞き間違えじゃなきゃ組み手って…。

「クロスがどうしても言うなら仕方ない。  
明日からしごいてやるぞ？」

最強の至竜様と組み手なんて…。

俺明日が命日だな。

眩しいくらいに輝く夕日を見てそつ思つたのだった。

つ  
く  
じ

## 愛情Ⅱ 修業

コーデリオを後にした俺たちはドワーフの集落地にいた。もちろんドワーフの集落地にくるのは始めてだ。

そして始めてみるドワーフの第一印象は一言で言つと『黒い』。

トンネルの中で生活しているためかひたすら黒い。顔が判別しづらいことこの上ない。

さて…なぜ俺たちがここにいるかというと、この近辺で帝国軍が目撃されたという噂を聞いたからだ。

あと、まあ強いていうなら修業も兼ねてだ。

「帝国のやつら、こんなところで竜狩りしてるのか…」

呆れるな…。

そこまでして竜の力が欲しいのか。

「帝国にとって目的を果たすためには場所や相手など詮なきことじやよ」

老いぼれたドワーフが横に座る。

このドワーフは一族の族長で、二百年近く生きている長老だ。

長老に目をやると長い白髭をさすっていた。

白く覆われた眉毛から、その下にある瞳がどんな感情を宿しているのか分からなかった。

「…そんなのおかしい」

「…優しい人間じゃのう。マナに選ばれただけのことはある」

目元を緩ませるといっそうシワが際立つ。

「…そのサラなんですけどどこに行きました？  
ここに来てから姿が見えないんですが。」

「フオツフオ。もうじき戻られるじゃろつ。」

「…噂をすればほら。」

先ほどまで吹いていた心地よい風が凧ぐとサラが突如現れる。

「…どうやら帝国軍の狙いはこの近辺で取れる鉱山のようだ」

「…帝国軍の視察に行ってたのか？」

「ああ。」

奴らは軍事金を募っているようだ。

大きな戦でもやるつもりなのだろう。」

肩にかかった髪を払うようにかきあげる。

「戦だつて?!」

「どういうことなの?!」

「ちよつ…お前らいきなり話の中に入ってくるなよ!」

クロスたちの話が聞こえたのか、ラビ・ユーリ・ナタリーも強引に加わる。

「戦つて…帝国は何と戦うつもりなんだ?!まさか…俺たちか?」

サラがいるんだ。

帝国軍がサラと戦うには相当な軍事力がある。

「…一理あるだろうが奴らの狙いはもつと大きい。」

「…なるほど帝国はとんでもないことを考えているようですね。」

長老はサラの言いたいことが分かったみたいだが俺たちの頭の上にはハテナマークが浮かんでいた。

「…帝国の真の狙いは『竜の楽園』ですかね？」

「竜の、楽園…？」

どこかで聞いたことがある…。

確か、昔父さんから聞いたような…。

頭を捻らせているとある単語が浮かぶ。

「…シンフォニア…！」

「どうしたんだクロス？」

「思い出した…！！シンフォニアだ！」



そこには多くの竜が暮らしている竜の楽園だって昔父さんに聞いた。

「

「そつだ。」

シンフォニアには亜竜だけでなく至竜もいる。」

そしてシンフォニアの中心にある城には莫大な魔力が宿っている。それゆえ奴らは狙うんだ、わらわたちの楽園を。」

「シンフォニアか…。それってどこにあるんだ？」

「たわけ、言うわけないだろう。」

サラに一括されたラビはしゅんと頂垂れる。

「ねえ…今さらだけど私たちのとんでもないことに首突っ込んだんじゃつたんじゃない？」

「確かに…。」

ナタリーとユーリの口元が心なしかひきつっている。

無理もない。

いろんな種族や世界を巻き込んだ戦をやるんだ。

もう引き返せない。

「…そうしょげるな。そなたらの命ぐらい守ってやる。

だが守られてばかりでいいのか？

そなたらにも戦う理由があるだろう？」

「ああ…そのためにも強くなるって決めたんだ！」

守られてばかりいられない。

「クロス…そうね。私たちも強くならないとね！」

「ピィー！」

みんなが視線を合わせ頷く。

「…では本題の修業のほうを始めるぞ」

「!… たく遅いよ」

「何か言ったか？」

ギロリと睨まれ俺は首を高速で左右にふる。

「時間も惜しい。荒削りな方法でそなたを鍛える」

荒削りって… 俺大丈夫かな？

みんなドンマイみたいな目で見るとよ…。

そして俺とサラは広い場所に移動し、互いに距離を置く。

「実戦形式でやる。武器や魔法何でも使用してよい。そなたの全てを持ってかかってこい」

「本当に武器も使用していいのか？  
サラは丸腰なのに。」

「わらわを誰だと思っている？余計な気遣いは無用だ。」

ああ…ちなみにわらわは魔法を使わない。ハンデだ」

ニツと笑う。

その笑みには絶対的な自信が現れていた。

「…後で後悔するなよ」

剣を抜くとスカルを唱え、一瞬でサラに詰め寄る。

「はあっ！！」

剣を降り下ろす。

が手応えはなく、目の前にいたはずのサラが消えていた。

「どこを狙ってる？」

後ろから声がし、体の芯からゾクゾクする。

体が硬直して指1本すらも動かせない…！！

何なんだこの大きな威圧感は…！！

「…この程度の気で動じるな。」

目を覚まさせるかのようにクロスの胸ぐらを片手で掴み、軽々と放り投げる。

反応できなかったクロスはむなしくも地面に叩きつけられる。

「くっつ…いつてえ…!!」

お尻を強打し、思わず悶えてまう。

「何を休んでいる？早くかかってこい」  
左手の人差し指を動かし挑発する。

「…っ！アースグレイヴ!!」

サラの足元の地面が揺れ始めると地面から鋭い土の刃が無数に突き出されていく。

瞬時にサラはその場から離れるが土の刃は伸縮し、サラを追い続けてくる。

「ほう…地の理を生かした魔法だな」

ここは岩壁に囲まれた場所だ。

地の魔法を使うには適している。

次々と襲い来る刃たちをかわしながらクロスに向かっていく。

「これでどうだ!」

クロスの周りを岩が覆い被さり、頑丈な守りとなる。

厚さ75cmの岩壁だ。しかも只の岩じゃない!

火の魔法と複合させた魔法だ!今は見えないが外表面に触れると高温のマグマが吹き出す。

いくらサラでもこれを喰らったら…!

「…!」

クロスの魔法をみて口角をあげる。

そのままスピードをあげ、拳を握りしめると力一杯岩壁にぶつける。

マグマが瞬時に吹き出し、火柱となりサラの体をそのまま飲み込む。

一方岩壁はサラの拳に耐えきれず粉々に破壊される。

「やったのか…?」

呆然と燃える火柱を見てみると、

「まさか」

火柱から声がすると徐々に炎が弱まり消えてしまう。

「！なっ…無傷?!」

あれだけ高温のマグマを受けたのに傷一つついていないんて…!!

「…竜の皮膚は強靱だと書物にも書いてあるだろう？」

亜竜ならば少しは堪えたかもしれないがわらわにはこれしきの炎は効かぬ。」

「そんなのありかよー…!!」

魔力を使いすぎた影響で動けなくなり、その場に倒れる。

「竜についての知識が浅い。」

知識不足は時に命を危険に晒すぞ?」

クロスの前にくるとそのまま腰をおろす。

「…体そのものが武器や防具にも匹敵するってズルくないか?」

「竜は人間のように服を着ないし、剣や盾を持たぬ。」

丸裸なのだからズルくなごない」

くそっ言い返せない…。  
やっぱり強いなサラの奴。

頂垂れるクロスを見てサラが小さくため息をつく。

「…その歳であれだけの複合魔法が使えるんだ。そなたはいずれ大物になるさ」

「！…サラ！」

あのサラが人を誉めるなんて…！

人知れず感動しているとサラが指を鳴らす。

「ホーリー」

途端に俺の体は光に包まれ、重かった体が驚くほど軽くなっていく。  
力がみなぎってくる…！

「回復してやった。ありがたく思え。  
これで稽古の続きがまたできるんだからな。」



サラの不敵な笑みを見て俺は確信した。  
動けなくなる度に回復され、稽古させられる。  
このサイクルがエンドレスに繰り返されるのだと…！

「さて続きをやるぞ」

そう言い満面の笑みを浮かべるサラ。

さっきの感動を返せよ！

ああ俺は何回地獄を見るんだろっ。  
そして地獄の稽古は続いたのだった。

つづく

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9389o/>

---

竜物語

2011年10月8日08時43分発行